

寂照説話の視点から

— 宇治拾遺物語編者の意識 —

菌部 幹生

一 寂照の出家・入宋説話

宇治拾遺物語・第五九話に「三河入道遁世之間事」という話がある。三河入道・大江定基が、若い後妻の死後に起こした道心を固めるために行つた奇行と、出家後に前妻と再会してもその道心が揺るがなかつたことを語る説話であるが、同話・類話・関係説話として、今昔物語集・巻第一九「參河守大江定基出家語第二」、続本朝往生伝・第三三話、今鏡・第九、発心集・巻二―第四話「三河聖人寂照入唐往生事」、元亨釈書・第一六、三国伝記・巻一一―第二四話「三河入道寂照事」、本朝高僧伝四七、古事談・巻二―一九二話、十訓抄・巻第一〇―四八話などが指摘されており、この話がかなりよく知られた説話であつたことが窺える。特に今昔物語集・巻第一九―第二話とは口吻類似する表現も少なからず見受けられ、また、その中にある渡宋の後に皇帝の前で鉢を飛ばした話は、宇治拾遺物語・第一七二話「寂照上人飛鉢事」との同話となつてゐる。そこで、この二つの話を対照させて引用しておく（引用は、どちらも岩波・新日本古典文学大系に拠るが、対照の都合上、引用書の段落は無視して、独自に○数字による段落番号を付した。傍線引用者）。

- ① 今昔、円融院ノ天皇ノ御代ニ、参河ノ守大江ノ定基ト云フ人有リ。参議左大弁式部大輔濟光ト云ケル博士ノ子也。心ニ慈悲有テ、身ノ才人ニ勝タリケル。藏人ノ巡ニ参河ノ守ニ任。
- ② 而ル間、本ヨリ棲ケル妻ノ上ヘニ、若ク盛ニシテ形子端正也ケル女ニ思ヒ付テ、極テ難去ク思テ有ケルヲ、本ノ妻強ニ此レヲ嫉妬シテ、忽ニ夫婦ノ契ヲ忘レテ相ヒ離ニケリ。然バ、定基此ノ女ヲ妻トシテ過グル間ニ、相具シテ任国ニ下ニケリ。而ル間、此ノ女、国ニシテ身ニ重キ病ヲ受テ、久ク悩ミ煩ケルニ、定基心ヲ尽クシテ、歎キ悲ムテ様々ノ祈祷ヲ至スト云ヘドモ、其ノ病ノ癒ル事無クシテ、日来ヲ経ルニ随テ、女ノ美麗也シ形モ衰ヘ持行ク。定基此レヲ見ルニ、悲ノ心譬ヘム方無而ルニ、女遂ニ病重ク成テ死ヌ。其後、定基悲ヒ心ニ不堪シテ、久ク葬送スル事無クシテ、抱テ臥タリケルニ、日来ヲ経ルニ、口ヲ吸ケルニ、女ノ口ヨリ奇異キ臭キ香ノ出来タリケルニ、疎ム心出来テ、泣々ク葬シテケリ。其後定基、「世ハ疎キ

- ① 参河入道、いまだ俗にてありけるおり、
- ② もとの妻をば去りつゝ、若く、かたち良き女に思つきて、
- それを妻にて三川へいて下りけるほどに、その女、ひさしくわづらひて、
- 良かりけるかたちもおとろへて
- 失せにけるを、かなしさのあまりに、とかくもせで、夜も昼もかたらひふして、口を吸いたりけるに、あさましき香の、口より出きたりけるにぞ、うとむ心いできて、泣く／＼葬りてける。それより、「世は憂き物にこそありけれ」と思ひなりけ

物也ケリ」ト思ヒ取テ、忽ニ道心ヲ発シテケリ。

- ③ 而ル間、其国ニシテ、国者共風祭ト云事ヲシテ、猪ヲ捕、生ケ乍ラ下シテケルヲ見テ、弥ヨ道心ヲ発シテ、「速ニ此ノ国ヲ去ナム」ト思フ心付テ、亦雉ヲ生ケ乍ラ捕テ人ノ持来レルヲ、守ノ云ク、「去来、此ノ鳥ノ生乍ラ造テ食ハム。今少シ味ヤ美キト試ム」ト。守ノ心ニ入ラムト思ヒタル、物モ不思エ又郎等共、此レヲ聞テ云ク、「極ク侍リケム。何デカ味ヒ増ラヌ様ハ有ム」ト勸メ云ケレバ、物ノ心少知タル者共ハ、「奇異シキ態ヲモ為ムズルカナ」ト思ヒケリ。而ルニ、雉ヲ生乍ラ持来テ揃ラスルニ、暫クハフタ／＼ト為ルヲ引カヘテ、只揃ニ揃レバ、鳥、目ヨリ血ノ涙ヲ垂テ、目ヲシバ叩キテ彼レ此レガ兒ヲ見ルヲ見テ、不堪シテ立去ク者モ有ケリ、「鳥此ク泣ヨ」トテ咲テ情無氣ニ揃ル者モ有リケリ。揃リ畢テツレバ下セケルニ、刀ニ随テ血ツフ／＼ト出来ケルヲ、刀ヲ打巾ヒ打巾ヒ下シケレバ、奇異ク難堪ナル音ヲ出シテ死ニ畢ニケレバ、下シ畢テ、煎リ焼ナドシテ試セケレバ、「事ノ外ニ侍レリケリ。死タルヲ下シテ煎リ焼タルニ

るに、

- ③ 三川国に風祭といふ事をしけるに、いけにゑといふ事に、猪を生けながらおろしけるを見て、「この国、のきなん」と思ふ心付てけり。雉を生ながらとらへて、人のいできたりけるを、「いざ、この雉、生けながらつくりて食はん。今すこし、あじはひやよきと、心みん」といひければ、いかでか心にいらんと思たる郎等の、物もおぼえぬが、「いみじく侍なん。いかでか、あじはひまさらぬやうはあらん」などはやしいひけり。すこし、ものの心知りたるものは、「あさましき事をもいふ」など思けり。かくて前にて、生けながら毛をむしらせければ、しばしはふたくとするを、押さへて、たゞむしりにむしりければ、鳥の目より血の涙をたれて、目をしばたゝきて、これかれに見合はせけるを見て、え堪へずして、立てのく物もありけり。「これがかく鳴こと」と興じわらひて、いとゞ情なげにむしるものもあり。むしりはてて、おろさせければ、刀にしたがひて、血のつゞ／＼といできけるを、のごひ／＼おろしければ、

ハ、事ノ外ニ増タリ」ト云ヒケルヲ、守ツクゴト見聞居テ、目ヨリ大ナル涙ヲ落シテ、音ヲ放テ泣ケルニ、「味ヒ甘シ」ト云ツル者ハ恐レテゾ有ケル。守、其ノ日ノ内ニ国府ヲ出テ京ニ上ニケリ。道心堅ク発ニケレバ、髻ヲ切テ法師ト成ニケリ。名ヲ寂照ト云フ。世ニ參河ノ入道ト云フ、此レ也。「吉々心ヲ堅メム」ト思テ、此ル稀有ノ事共ヲシテ見ケル也ケリ。

④ 其後、寂照、京ニシテ、行キテ知識ヲ催ケルニ、一ノ家ニ至タリケルニ、呼ビ上テ疊ニ居ヘテ、美饌ヲ儲テ令食ムト為ルニ、簾ヲ卷上タル内ニ、服物吉キ女居タリ。見レバ、我ガ昔シ去リニシ妻也ケリ。女ノ云ク、「彼ノ乞匄、此クテ乞食セムヲ見ムト思ヒシヨ」ト云テ見合セタルヲ、寂照恥シト思タル気色モ無クシテ、「穴貴」ト云テ持来タル饌吉ク食テ、返ニケリ。極テ難有キ心也ケリ。道心堅ク発ニケレバ、此ル外道ニモ値テモ不驕スシテ、貴ク也ケリ。

⑤ 其ノ後、寂照、心ニ、「震旦ニ渡テ止事無キ聖跡ヲ礼セム」ト思フ心付テ、……(略)……泣々ク返ニケル。

⑥ 其後、寂照、既ニ震旦ニ渡テ、思ヒノ如ク所々ノ聖跡ヲ礼ヌ。天皇モ待受テ止事無ク敬ヒ帰依シ給ヒケリ。而間、天皇其ノ国ノ止事無キ聖人共ヲ召集メテ、堂ヲ莊リ、僧供ヲ儲テ、勲ニ供養シ給フニ、天皇ノ云ク、「今日ノ齊会ニハ手長不可入ズ。只前ニ居タル所ノ鉢共ヲ各令飛テ、僧供ヲバ可請キ也」ト宣フ。心ハ日本ノ寂照ヲ試ムガ為也ケリ。然レバ宣旨ニ任テ一和上ヨリ始メテ、次第ニ各ノ鉢ヲ令飛テ僧供ヲ請ルニ、寂照ハ戒臈ノ浅ケレバ最下ニ着タルニ、寂照ガ巡ニ成テ、自ラ鉢ヲ取テ立ムト為ルニ、人有テ云ク、「何デ力然力有ラム。鉢ヲ令飛テコソ請メ」ト。其時ニ、寂照ガ鉢ヲ取テ捧テ云ク、「鉢ヲ令飛ル事ハ別ノ法トシテ、其ノ行法ヲ修シテ令飛ル事也。而ルニ、寂照未ダ其ノ法ヲ不習ズ。日本ノ国ニハ古ヘ希ニ其法ヲ習ヘル人有ケリト伝ヘ聞クト云ヘドモ、末ノ世ニハ其法ヲ

あさましく、たへがたげなる声をいだして、死はてければ、おろしはてて、「いりやきなどして、心みよ」とて、人に心みさせければ、「ことの外に侍けり。死たるをろして、いりやきしたるには、これはまさりたり」などいひけるを、つくぐくと見聞きて、涙をながして、声をたてて、おめきけるに、「うまし」などいひけるものども、したくたがひにけり。さて、やがてその日、国府をいでて、京にのぼりて、法師になりけり。道心のおこりければ、よく心をかためんとて、かゝる稀有の事をして見ける也。

④ 乞食といふ事しけるに、ある家に、食物えもいはずして、庭に疊をしきて、物を食はせければ、此疊にゐて、食はんとしけるほどに、簾を卷上たりける内に、よくしやうぞきたる女のゐたるを見ければ、わがさりにし、古き妻なりけり。「あのかたい、かくてあらんを見んと思ひしぞ」といひて、見合たりけるを、はづかしても、苦しとも思たるけしきもなく、て、「あな、たうと」といひて、物よくうち食ひて帰にけり。ありがたき心也かし。道心をかたかくおこしてければ、さる事にあひ

たるも、苦しとも思はざりけるなり。

⑤ 今昔、三川入道寂照といふ人、唐に渡りて後、唐の王、やんごとなき聖どもを召し集めて、堂を飾りて、僧膳をまうけて、経を講じ給けるに、王の給はく、「今日の齋筵は、手長の役あるべからず。をのく我鉢を飛せやりて、物は受くべし」との給ふ。其心は、日本僧を試んがためなり。さて諸僧、一座より次第に鉢を飛せて、物を受く。三川入道、末座に着たり。

その番にあたりて、鉢を持って立たんとす。「いかで鉢をやりてこそ受けめ」とて、人々制しとゞめけり。寂照申けるは、「鉢を飛する事は、別の法を行ひてするわざなり。しかるに、寂照、いまだ此法を伝行はず。日本国においても、此法行ふ人ありけれど、末世には行ふ人なし。

行フ人無シ。此レ絶タル事也。然レバ何に依テカ
寂照ガ鉢ヲ令飛ム」ト云ヒ居タルニ、「日本ノ聖人
ノ鉢遲シ遅シ」ト責ケレバ、寂照思ヒ煩テ、心ヲ
至テ、「本国ノ三宝助ケ給ヘ。我レ若シ鉢ヲ不令飛
ズハ、本国ノ為ニ極テ恥也」ト念ズル程ニ、寂照
ガ前ナル鉢、俄ニ狛鷲ノ如ククルクト転テ、前
ノ鉢ヨリモ疾ク飛テ行テ、僧供ヲ請テ返ヌ。其ノ
時ニ天皇ヨリ始メテ、大臣・百官皆礼ミ貴ブ事無
限シ。其ノ後、天皇、寂照ヲ帰依シ給フ事無限シ。
⑦ 亦、寂照五台山ニ詣テ、……(略)……
⑧ 此ノ事共ハ寂照ノ弟子ニ念救ト云僧ノ、共ニ行
タリケルガ、此ノ国ニ返テ語り伝ヘタル也、彼ノ
国ノ天皇、寂照ヲ帰依シテ、大師号ヲ給テ、円通
トゾ云ヒケル。此レモ機縁ニ依テ出家シテ此ク他
国ニテモ被貴ル、也ケリト語り伝ヘタルトヤ。

第①段落は、定基についての説明であるが、今昔物語集が定基の生きた時代や出自・人柄等にまで及んで略述するのに対して、宇治拾遺物語では「参河入道、いまだ俗にてありけるおり」とあるだけであり、定基その人よりも話の内容の方に興味を中心があるように見て取れる。宇治拾遺物語のそうした性向は、関連のある説話を収める諸書と比べた時にも、ほぼ同様のことが言い得るように思われる。確認の意味で、諸書における第①段落に該当する箇所を列記しておく。

いかでか飛さん」といひてゐるに、「日本の聖、鉢遅しく」とせめければ、日本の方に向て、祈念して云、「我國の三宝、神祇助給へ。恥見せ給な」と念じ入てゐる程に、鉢、こまつぶりのやうにくるめきて、唐の僧の鉢よりも早く飛て、物を受けて帰ぬ。その時、王よりはじめて、「止事なき人也」とて、拝みけるとぞ申伝たる。

⑦ ⑧

同定基者。齐光卿第三子也。早遂祖業。続為夕郎。采爵之後。任参河守。長於文章。佳句在人口。夢必可往生

(続本朝往生伝。引用は岩波・思想体系『往生伝 法華験記』によつた)

その三河の聖も博士におはして、大江の氏の上達部の子におはしけるが、三河守になりて国へ下り給ひけるに

(今鏡。引用は、講談社学術文庫によつた)

三河の聖と云ふは、大江定基と云ふ博士、是なり。三河守になりたりける時

(発心集。引用は、新潮日本古典集成によつた)

寂寂昭。諫議大夫江齐光子也。俗名定基。仕官至参州刺史。(元亨釈書。引用は新訂増補国史大系によつた)

一条院御宇、大江定基ト云人ハ参議左大弁济光卿ノ息男也。定基三河守ニ任シテ国務ノ間

(三国伝記。引用は、三弥井書店・中世の文学によつた)

参河守大江定基ハ、参議左大弁济光ト云人ノ子也。出家シテ寂照ト云。

(東斎随筆。引用は、三弥井書店・中世の文学によつた)

このうち、今鏡は、慶滋保胤の死に際して三河の聖が請文を奉つたことを記したのを受けて記したものである。また、この他、宝物集には、大江定基の名のみが記され、源平盛衰記にも、「大江定基三河守二任ジテ」とだけある(源平盛衰記の引用は、三弥井書店・中世の文学によつた)。ただし、宝物集は、話の末尾に、「法名寂照、三川入道と云是なり」と、人物説明的な要件を付加して終わっている(宝物集の引用は岩波・新日本文学大系によつた)。いづれにしても、ジャンルを問わず、ほとんどの書物が定基の説明にある程度の字数を割いていることが確認できるだろう。

第②段落は、任国へ下つた定基が若い妻の死に直面して道心を起こす話であるが、今昔物語集に傍線を付した、「極テ難去ク思テ有ケルヲ、本ノ妻強ニ此レヲ嫉妬シテ、忽ニ夫婦ノ契ヲ忘レテ相ヒ離ニケリ」・「定基心ヲ尽クシテ、歎キ悲ムテ様々ノ祈祷ヲ至スト云ヘドモ、其ノ病ノ癒ル事無クシテ」・「定基此レヲ見ルニ、悲ノ

心譬へム方無」・「忽二道心ヲ発シテケリ」といった内容が宇治拾遺物語には見られないことでもわかるように、宇治拾遺物語のほうが簡略な内容・表現となっている。しかし、共通部分について見てみると、口吻類似している点も少なからず見受けられ、両書が同原の説話を収録している可能性は高いように感じられる。その点を確認するために、この第②段落と同じような内容を含む他書の当該部分の記事を見ておきたい。

続本朝往生伝では、「未発心之前。唯事狩獵。聞人咲曰。不是往生之業。其後於任国。所愛之妻逝去。爰不堪恋慕。早不葬斂。觀彼九想。深起道心。遂以出家。（法名寂照）」とあり（傍線引用者）、九想を觀じて出家したという記述はあるものの、ストーリー的にはかなり簡潔な内容となっている。宝物集では、「おもはしかりける妻におかれて、世の中をうらみて」とあるだけで、いつそう簡略な内容となっている。

発心集にも（傍線引用者）、

もとの妻を捨てて、たぐひなく覚えける女を相具してくだりける程に、国にて、女、病を受けて、つひにはかなくなりければ、嘆き悲しむこと限りなし。恋慕のあまりに、取り捨つるわざもせず、日比経るまに、成り行くさまを見るに、いとどき世のいとはしさ思ひ知られて、心を発したりけるなり。

とあり、「日比経るままに、成り行くさまを見るに」のように、続本朝往生伝に見られた九想觀と通じる記述はあるものの、これまた簡潔な内容となっている。

今鏡には（傍線引用者）、

三河守になりて、国へ下り給ひけるに、類なくおぼえける女を具しておはしけるほどに、女みまかりければ、悲しびのあまりに取り捨つることもせで、なりまかるさまを見て、心をおこして、やがて頭おろして、都にのぼりて、

とあり、定基への敬意表現が用いられているという特徴はあるが、九想觀に通じる記述も含めて、発心集ときわめてよく似た表現となっている。

元亨釈書では、「会失配。以愛厚緩喪。因觀九相。深生厭離乃割冠纓投叡山源信之室。早名講学。」として（傍線引用者）、「因觀九相」のように続本朝往生伝と共通する要素が入っているものの、さらに簡略な記述となっている。なお、「乃割冠纓投叡山源信」に当たる内容は、今鏡や発心集では第③段落の後に触れられている。

一方、三国伝記には、

赤坂ノ力寿ト云遊女ニ狎レテ契深カリケルガ、無常ノ風妙ナル花ノ姿ヲ吹キ、有漏ノ霧美ナル月ノ容ヲ陰。彼女息絶眼閉ヌレバ、双枕ヲ面影モ同レシ席ヲ移香モ替リ終ヌレ共、色貪ノ愛執不レシテ尽七日ヲ満シテ野外ニ送ル。恋慕ノ火ハ燒ニ哀傷ノ胸ニ、別離ノ涙ハ浸ニ愛著ノ身ニ。是ヲ逆縁ノ善智識トシテ、忽ニ出家シテ号シ寂照法師ト、

とあり、任国の三河で亡くなったのは都から具して行った若い妻ではなく、赤坂の力寿という遊女であったとする。源平盛衰記も、「赤坂ノ遊君力寿ニ別テ道心出家シテ」と、三国伝記と通ずる内容載せている（三国伝記の引用は、三弥井書店・中世の文学によった）。

こうして見ると、宇治拾遺物語と今昔物語集との近似性は他書に比べてかなり近いものであることが確認できる。特に、屍に対する口吸いという行為やその際に異臭を意識するといった強烈な印象をもつモチーフの存在は、今昔物語集と宇治拾遺物語とが同原の説話を用いている証左と見てよいであろう。

第③段落は、道心を起こした定基が任国・三河でその道心を固めるために雉を生きのまま捌くよう命ずる話であるが、前段に比べて今昔物語集と宇治拾遺物語との類似性はいつそう顕著であり、同原の話であることは明白であろう。この中で、今昔物語集だけに見られる「弥ヨ道心ヲ発シテ」という表現は第②段落末尾の「忽二道心ヲ発シテケリ」を受けたもので、「參河守大江定基出家語」という題名に象徴されるこの話における今昔物語集のテーマが強調された表現でもある。対して、宇治拾遺物語にのみ見られる「いけにゑといふ事に」という記述は、宇治拾遺物語がわざわざ付加したというよりは、本来この話に存在して少しもおかしくない内容である。また、今昔物語集の「極ク侍リケム」より、宇治拾遺物語の「いみじく侍なん」の方が内容的

な齟齬がないなどという点も、宇治拾遺物語のほうが幾分か原話を正確に伝えている可能性を示しているのかもしれない。

第④段落は、かつて別れた妻の家に乞食に訪れた寂照が、辱めを受けるような言葉をかけられても、少しも動じることがなかったという話であるが、文中に二重傍線を付した「呼び上テ畳二居ヘテ」と「庭に畳をしきて」や、「不騒ズシテ、貴ク也ケリ」と「苦しと思はざりけるなり」のように、小異はあるものの、やはり両書は本来同原の説話であると見て取ることができる。ここでも、他書の当該箇所を確認しておく。

続本朝往生伝では、「多年之間。修行仏法。或次第乞食。不屑今生之事」とあるばかりで、旧妻とのことは一切触れず、このあと如意輪寺に住したこと、寂心（慶滋保胤）を師としたことなどを記す。

発心集では、

かしらおろして後、乞食しありきけるに、「我が道心は実に発りたるやとこころみん」とて、妻のもとへ行きて物を乞ひければ、女、これを見て、「我にうき目見せし報ひにかかれとこそは思ひしか」とて、うらみをして向ひたりけるが、何とも覚えざりければ、「御徳に仏になりなむずる事」とて、手をすり、悦びて出にけり。

とある。旧妻のもとへ乞食に行く話はあるが、表現レベルでは宇治拾遺物語や今昔物語集とはやや離れており、このあとには、寂心を師としたこと、如意輪寺に住したこと、源信に学んだことなどを記している。今鏡には、物など乞ひありきけるに、もとの妻にてありける女、「われを捨てたりし報いに、かかれとこそ思ひしに、かく見なしたること」など申しければ、「御徳に仏になりなむこと」とて、手をすりて喜びけると伝へ語り侍る。

とあって、第②段落と同様に、発心集と酷似している。ただ、このあとは、寂心を師としたこと、如意輪寺に住したこと、源信に学んだことなどを記したうえで、平惟仲が北白川で六十巻の講説を催した際に読師を勤め、

訓点を施した話を載せており、発心集と完全に一致するというわけではない。

宝物集・元亨釈書・三國伝記・東斎隨筆・源平盛衰記などには第④段落の内容に該当する記事はなく、宇治拾遺物語と今昔物語集とが他書と比較してより類似した内容となっていることが、さらに確認できるかと思う。

ここまでは、宇治拾遺物語・第五九話の内容となっている。宇治拾遺物語と今昔物語集とを比較すると、第②・③・④段落は、もともと一連の説話として存在していたもののように思われる。そうして、宇治拾遺物語の話を見るかぎり、第③段落を中心として、第②段落が前置き、第④段落が後日譚であるような書きぶりとなっている。そのように考えると、第②段落において、宇治拾遺物語が今昔物語集よりも略述的な内容となっていることも納得がいくように思われる。

第⑤段落は、渡宋して聖跡を礼せんと決意した寂照が比叡山にいる我が子と別れを告げるために会いに行く話であるが、今昔物語集以外にこの話を収載する本は見当たらないようである。寂照の渡海前のことに関しては、続本朝往生伝に、

寂心遷化之後。長徳年中条状。申下依本願可拜大宋国清涼山之由。幸被可許。既以渡海。進発之時。於山崎宝山。為母修八講。以静照為講師。此日出家之者五百余人。〈至婦女者、自車切髪与講師云々〉四面成堵。聽聞之衆。莫不涕泣。

とあり、勅許を得ての渡宋であったこと、直前に山崎の宝山（宝寺）において母のために法華八講を修したことなどが記される。宝物集でも、山崎宝寺での法華八講について記すが、そのことが「諸家の日記」（不詳）に書いてあるようだとして、さらに、

その頃の人「一定渡海はせんずるか」と申しければ、

とまらんとまらじとも思ほえずいづくもつゐの住かならねば

と、金葉集三奏本（三三四番）や詞花集（一八一番）などにも見える和歌を載せている。また、元亨釈書では、

「長保二年。信作台宗問目二十七条。付昭寄南湖知礼法師。礼延昭为上客」として（傍注引用者）、あたかも寂照の渡宋の契機が源信の依頼にあったかのような書き方となっている。今鏡・発心集・源平盛衰記・三国伝記・東斎隨筆などには渡宋に当たつての特別な出来事は記されていない。

第⑥段落は、渡宋した寂照が皇帝の前で鉢を飛ばしたという話であるが、宇治拾遺物語では、第五九話とは遠く離れた第一七二話に位置する。このなかで、今昔物語集の「思ヒノ如ク所々ノ聖跡ヲ礼ヌ。天皇モ待受テ止事無ク敬ヒ帰依シ給ヒケリ」という内容は第⑤段落の、「寂照、心ニ、「震旦ニ渡テ止事無キ聖跡ヲ礼セム」ト思フ心付テ」という部分と、第⑥段落のこの後の内容から付加的に記したものと推測される。また、「戒臈ノ浅ケレバ」「此レ絶タル事也」「大臣・百官」などの表現も、やはり付加された説明的な言辞であろうし、段落末尾の、「其ノ後、天皇、寂照ヲ帰依シ給フ事無限シ」という記述も、重複的な内容ではない。「寂照思ヒ煩テ、心ヲ至テ」と「日本の方に向けて、祈念して云」にも、内容的には大きな違いはないので、この話は、今昔物語集がやや詳しく表現されているかに見えても、実は両書の記述内容にはそれほど大きな差はないということになる。最も大きな相違点は、宇治拾遺物語の、「我國の三宝、神祇助給へ」という寂照の言葉の中に、今昔物語集には見られない「神祇」という語が入っていることであろう。この話のこの位置に神祇信仰が入る必然性は考え難く、仏教的色彩の強くない宇治拾遺物語における付加の可能性が高そうな語であるかのように思われがちではあるが、既に、続本朝往生伝にも（傍線引用者）、

到大宋国。安居之終。列於衆僧末。彼朝高僧。修飛鉢法。齋食之時。不自行向。次至寂照。心中大恥。深念本朝神明仏法。食頃觀念。爰寂照之鉢飛繞仏堂三匝。受齋食而來。異国之人悉垂感涙。皆曰。日本国不知人。令奮然渡海。似表無人。令寂照入宋。似不惜人云々。

とあり、「深念本朝神明仏法」といった表現が用いられている。従つて、この点から宇治拾遺物語の優位性をいうことはできない。なお、続本朝往生伝では、この後に、長元七年に杭州での遷化、臨終に際しての瑞祥掲掲、絶句と和歌を作つたことなどが記される。宝物集では、「つゐに大唐国へわたりて、清涼山の麓に草庵をむすびて」とあつて、そのまま臨終に際しての作詩について記され、鉢を飛ばす話はない。発心集には、「かくて、終に唐へ渡つて、云ひしらぬ験どもあらはしたりければ、大師の名を得て、円通大師と申しける」とあつて（傍線引用者）、その後、往生に際して来迎の樂が聞こえたこと、漢詩と和歌を作つたことなどを記す。「云ひしらぬ験どもあらはしたりければ」の内容が飛鉢説話である可能性は否定できないが、具体的な記述はないといわざるを得ない。今鏡もほぼ同内容で、「遂に唐国におはしても、言ひ知らぬことどもおはしければ、大師の御名得給ひて、円通大師とこそ聞え給ふめれ」（傍線引用者）とあつて、臨終の際の樂の音、詩・歌について記す。元亨釈書は、寂照が厚遇されたこと、無量寿仏像を上進して真宋皇帝に紫方袍を賜つたこと、寂照を称える贊などを載せ、飛鉢については触れないが、寂照が黒金の水瓶を持つていたこと、晋公と交わした漢詩にその水瓶のことが歌われたことなどを記す。三国伝記は、「長保五年ノ秋八月廿五日ニ入唐、清涼山ニ到大聖文殊ヲ拝シ、彼ノ山ノ麓ニ居。円通大師ト云是也」と記した後に、ある阿育王が建立した石塔の一つが近江国にあり、その影が清涼山の池に映るのを僧達が礼拝しているというところを、寂照が知つて書き記し、箱に入れて海に投入したこと、その後臨終に際して作詩したこと、寂照の投げ入れた箱が日本に流れ着き、石塔の発見に到つたことなどを語る。源平盛衰記も、「其後大唐国ニ渡、清涼山ニ参タリケレバ」として、石塔の影を拝む話を書き付けて海に入れたものが日本に流れ着く話を続けるが、作詩の話や石塔発見の話はない。また、両書とも飛鉢の話には全く触れない。東斎隨筆は、「此人渡唐シテ諸ノ聖迹ヲ礼ス。僧供ヲ受トキ、寂照鉢飛テ物ヲウクル事アリ」と（傍注引用者）、たいへん簡潔に飛鉢のことに触れている。

第⑦段落は、寂照が五台山で湯浴みの施入を行つた際に、文殊菩薩の化身である瘡のある女に食物を与えたという話で、光明皇后の説話を想起させるが、わずかに東斎隨筆において、「五台山ニ詣テ、文殊ノ女ト化セルヲ見ル」とあるだけで、続本朝往生伝・宝物集・今鏡・発心集・源平盛衰記・元亨釈書・三国伝記などでは

全く触れられていない。

第⑧段落は、今昔物語集における末尾の評語様のもので、年救によって寂照説話が伝えられたことや、大師号のことを述べ、および、巻第一九のテーマとの関わりから出家の機縁に触れて結んでいる。円通の第四号については、今鏡・発心集・三国伝記・東斎隨筆で触れるが、年救による説話の伝承について触れるものはない。ただ、入唐僧の年救は御堂関白記や小右記に度々登場しており、寂照にまつわるエピソードを日本に伝えた人物としては最もふさわしい。

さて、これらの諸書を通覧すると、定基（寂照）説話の近似性は、宇治拾遺物語と今昔物語集とが飛び抜けて高く、両者にきわめて近い連関の存在、例えば共通の典拠に拠っている可能性のようなものを想像させる。ただ、それが続本朝往生伝ではないであろうことは、充分に察せられる。それは、続本朝往生伝の記述を基にして、今昔物語集と宇治拾遺物語がそれぞれ別々に説話を再生させたと考えると理解できない二書のみの共通性がありにも多くあるからである。また、宇治拾遺物語において第五九話と第一七二話という別の説話として採りあげられている話が、本来、今昔物語集のような一連の説話であったかどうかという問題については、おそらく、本来、宇治拾遺物語におけるような二話別々の形で存在していたものと考えておきたい。それを、今昔物語集が定基一代記のような形に統合したものであるまいか。それは、例えば、共通部分における今昔物語集の独自記事が、他の個所との重複的内容であったり、前後の内容から単純に付加できるものであったりすることによる。宇治拾遺物語は、二つの説話のどちらにおいても定基に関する人物説明に筆を割かないばかりか、重複的な内容もほとんどない。基本的には定基への関心というよりは、話そのものへの興味による採録なのであろう。ただ、宇治拾遺物語・第五九話に限って言えば、第③段落を中心にして全体を構成する方向で、宇治拾遺物語による手が加えられているということは、十分に考えられるだろう。

二 寂照説話の視点

宇治拾遺物語は、僧侶に対して、必ずしも好意的とはいえない眼差しを見せる場合が、しばしばある。しかし、前節で見てきた話に関しては、定基への視線は決して悪いものとはいえないであろう。第五九話におけるような、奇行とも言えるような行為に対しても、道心の固さを強調する。これは、一続きの仏教説話群の最後に僧侶を笑い飛ばす話を置くアイロニーで締め括るような手法を考慮に入れるとしても（このことについては後掲の拙稿「良源説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」で述べた）、定基説話の置かれた位置に関して言えばそうした構成になっていない。それは、定基に対する宇治拾遺物語編者、あるいは編者の属する環境の、固有の視点が影響しているからではあるまいか。

宇治拾遺物語の編者については、かつて、「宇治拾遺物語編者考―南家貞嗣流経範を擬す―」（駒澤国文・二六号）において、孝範の息男である文章博士・経範が極めて有力であろうことを提唱し、さらに、その後の一連の拙稿、「実頼説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」（駒澤短大国文・二五号）、「伊尹説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」（駒澤短期大学研究紀要・二三号）、「通俊説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」（水原一氏編『古文学の流域』新典社研究叢書91）、「頼通説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」（駒澤国文・三三三号）、「兼通説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」（駒澤短大国文・二七号）、「道長説話の文・二六号）、「相撲人説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」（駒澤短大国文・二八号）、「季通説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」（駒澤短大国文・二九号）、「忠家説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」（駒澤短大国文・三〇号）、「相応説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」（駒澤短大国文・三一号）、「良源説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」（駒澤短大国文・三二号）、「頼信説話の視点から―宇治拾遺物語編者の意識―」（駒

く(古本説話集の引用は、岩波・新日本古典文学大系によった)。

今は昔、世のいたく悪かりける年、五月長雨のころ、鏡の筥を、女持て歩いて売りけるを、参河の入道のもとに持て来たりければ、沃懸地に蒔きたる筥也。内に薄様を引き破りて、をかしげなる手にて書きたり。今日までと見るに涙のます鏡馴れにし影を人に語るな

とあるを見て、道心発りけるころなりければ、いみじくあはれにおぼえて、うち泣きて、物十石車に入れて、鏡は返しとらせてやりてけり。雑色男帰りて、「五条町の辺に、荒れたりける所に、やがて下しつ」となむ語りける。誰といふとも知らず。

この説話は、拾遺集と宝物集を除けば、道心を起こした頃であったために同情心を起した、あるいは、まずまず道心を固める契機となった出来事であった、として語られる。つまり、前節で取り上げた第④段落と並べるか置き換えるかしても十分に成り立つ話でもあるわけである(実際に、十訓抄は、この後を、入唐往生の話へと続けている)。これだけ著名な説話で、しかも、今昔物語集や古本説話集のような、宇治拾遺物語との共通説話の多い説話集にも収録された話である以上、宇治拾遺物語集の編者が知っていた可能性はかなり高いといえるだろう。そういう意味からいけば、宇治拾遺物語は、あえてこの話を収載しなかったということになる。それは、宇治拾遺物語の編者が、和歌に対する興味・関心がそれほど高くなかったこと、定基の話にしても人物的興味から乗せているわけではないこと等を意味しているのではあるまいか。

ところで、栄花物語・巻第二九「たまのかざり」の中には、枇杷殿皇太后妍子の病氣平癒の祈りに関する記事として、「枇杷殿には、この頃の三井寺の心普僧正・明尊僧都・寂照など御修法仕うまつる。かかれど験といふ事ゆめに見えさせ給はぬ事を、上の御前心細くおぼし歎きたり」とあって(栄花物語の引用は岩波・日本古典文学大系によった)、寂照の験力を疑問視したり、上の御前(倫子)が心細く思ったりするといった記述が出てくる。この後、同じ巻第二九「たまのかざり」の中では、「寂照といふ人、御物のけなど現したりとて、

とのゝ御前『これは行いみじうすとき、し者なれば、必ず験あらん』とてあまりになさせ給。』この御心地は、寂照の幸なりけり』と世の人申める」とあって(傍注ママ)、験力を認められて阿闍梨に取り立てられるという記事も出てくるが、世間の人々が妍子の病を寂照にとつての幸いであると噂したというのは、必ずしも一方的によい評価であるとはばかりは言えないのではあるまいか。

また、古事談・巻三「寂照前生ハ唐ノ娥媚山ノ僧タル事」では、寂照の前生が娥媚山の僧で、師匠と法門を争つた妄執によつて往生できずに日本に生まれたことが記される。寂照の入宋や極楽往生が周知の事実であるとの前提に立っての話である可能性もあるが、古事談の中ではそうした寂照の事績については全く触れられないままである。これと同じ話は、十訓抄・巻第十にも出るが、末尾に、「さりければにや、俗にてありける時より、頭光あらはして見えけり」と(十訓抄の引用は小学館・新編日本古典文学全集によった)、古事談には見られない記述を載せている。十訓抄に載る定基の説話は、鏡売りの女の話、臨終時の作詞の話、寂照の前生の話という三段構成になっているが、そのうちの第二段の末尾にも、「ただし、この詩、保胤作れりといふ。たづぬべし」と記し(前半の二句が新撰朗詠集に保胤の作として載るようなことが意識されたか)、疑義を表明しており、定基(寂照)に対する賞賛や憧憬のみに偏しているとはいえない書きぶりとなっている。

このように考えてみると、栄花物語あるいは古事談や十訓抄のように、必ずしも好印象の寂照像ばかりが喧伝・膾炙されてきたということでもないように思われる。宇治拾遺物語が、編者や家の視点を意識的・無意識的と問わず反映していることを考えるならば、前節で見てきた寂照説話の在り方には、やはりそれなりの意味があると考えるべきなのである。

寂照自身は、入宋後も日本との交流を持ち、道長に対しても消息や書物を贈っており、御堂関白記にも繰り返し登場する。また、例えば、後に渡宋した成尋も、その際の記録である参天台五台山記において、力を込めて寂照の事績を書き記しているように、人々の記憶に甦ることが少なくなかったことと思われる。そうした背

景の中で、寂照の説話は、あるいは出家機縁譚として、あるいは奇瑞譚として、あるいは往生譚として、あるいは風流譚としてといった具合に、さまざまな興味と関心を持って諸種の形に形象し直され続けたのであろう。宇治拾遺物語は、しかしそうした寂照その人に対する共感や興味からというよりは、定基の奇行ともいえる行為や地方の風習、あるいは異国での奇瑞などといったことから関心を持って説話を収録したものと推測する。そうして、その際、編者の置かれた家や境遇などといった環境が、定基像の形成に影響を与えたのは当然のことであつたであらうと考える。

付記 本稿は、平成十五年度の駒澤短期大学国文科の専門科目「説話文学Ⅱ」の講座の中で宇治拾遺物語を取り扱った際に、受講生とのやり取りの中で、その質疑に答えようとしてまとまってきた部分が多いことを併記しておく。

大方のご叱正を賜りたい。